

「つたえること・つたわるもの」 №203

〈いのち〉と〈からだ〉の社会学4

ホメオパシー その4

「患者の物語から人生を癒す薬をさがす、  
ホメオパシーの自然医学」

健康ジャーナリスト 原山建郎

ホメオパシーは、18世紀末にドイツ人医師のサミュエル・ハーネマンによって体系化され、欧米を中心に広まった自然療法です。日本では代替療法と呼ばれていますが、フランスでは正統医学のひとつに数えられ、健康保険も適用されています。

レメディ（ホメオパシーの薬）は、原材料（植物、動物・鉱物）を水に溶かし、その物質の分子が残らないほど希釈するのですが、薄めれば薄めるほど効果が高いといえます。ライフアートクリニック・中村裕恵院長（※当時）に、ホメオパシー（自然療法）の実際についてお聞きしました。

◎ 「本当にやりたいのは、

からだ全体を診る医療なのです」

★胃カメラを習得して、消化器専門医をめざす

「最初は、胃カメラ（内視鏡）の専門医になろうと思いました」

1992（平成4）年、東京女子医科大学を卒業した中村さんは、同大学附属病院の消化器内科で研修医としての臨床経験を積むことになった。

あるとき4～5人で医療チームを組み、6人部屋の女性患者を担当することになった。そのなかに潰瘍性大腸炎の患者が入院していたが、相部屋の患者たちにいじめられやすい性格で、潰瘍はさらに悪化・進行してしまった。

いじめる側の患者たちも、重い病気のせいで性格が悪くなっているように思えたが、まだ研修医であった中村さんは、上司の指導医にそのことを話せないでいた。

「カンファレンス（※患者さんを中心に、医師、看護師、療法士など、関係する医療従事者が集まって情報共有や話し合いを行う場）では、潰瘍性大腸炎が悪化したのであれば、大腸をとれば（切除）いいということになり、その患者さんは

外科に上げられて大腸全切除となりました。病室の担当を通じて、ころとからだが複雑にからみあいながら、病気が徐々に進行していくのが慢性病なのだと思うようになっていましたが、悪いからだの部分だけを対象にするのが、現代西洋医学なのだという治療の実際をまのあたりにしました。

そのとき、はたして専門医の行う医療だけが、医療のすべてなのだろうかという疑問が芽生えました」

研修を終了するころには、約200人の胃カメラ操作を実習したことから、その経験と熱心な勉強ぶりを指導医から評価されて、静脈瘤の内視鏡による治療を許可された。

いよいよ新前医師として待望の治療である。しかし、中村さんはその記念すべき静脈瘤の内視鏡治療第一例を行っている最中に、「私がほんとうにやりたい医療はこれじゃない、もっとからだ全体を診る医療ではないか」という思いが、突然湧きあがってきたという。

大半の医師は研修医時代に誰もが感じる、素材で清新な思いを抹殺し、患者（人間）ではなく病気（病巣）だけを診る医師になっていくのかもしれない。しかし、中村さんはその思いをひとまずこころの奥に温存し、さらにいっそう胃カメラの習得に励むことで、ひたすら消化器科の専門医をめざしたのである。

★アレルギー性結膜炎に、自然医療を試す

東京・八王子の胃腸科専門病院に大学病院から出向したが、八王子はスギ花粉が飛び交う花粉症のメッカで、中村さんはひどいアレルギー性結膜炎に悩まされることになる。

「症状を抑えるためにステロイド剤をどんどん使いましたが、一向によくなりません。臨床医になって3年目に入り、仕事のストレスにも悩んでいた時期でしたが、たまたま出会ったのがアロマセラピー（植物の精油成分を用いた自然療法）とアーユルヴェーダ（インドの伝統医学）でした。“OLのストレス解消にアロマポットでいい香り”というキャッチフレーズにも惹かれて、近所のアロマ

セラピーサロンに通い始めました。

そこで、精油を使ったマッサージや、額にごま油をたらすシローダーラというアーユルヴェーダの手法を体験しましたが、さまざまなストレスでざわついていた頭がすっきりして、瞑想と同じような効果が得られました。精神面ではこれで健康になったという感覚がありました」

ところが、今度は肌に発疹が出た。自然療法というアグラベーション（※治癒途上で起こる一時的な悪化で、好転現象）なのだが、まだそのことを知らない中村さんは皮膚科で「精油による接触性皮膚炎の疑い」という診断を受け、再びステロイド剤を使うようになった。

「でも、何となくこれ（ステロイド）を塗っていても、よくなるという感覚があり、ある日、久しぶりに休暇をとりました。家でのんびりしていたら、曇り空から急に晴れ間が見えるように発疹が消えたのです。とてもびっくりしましたが、からだがよくなる時というのは、安静とかリラックス、養生がたいせつなのだと、自分のからだで体験したことがきっかけで、自然療法に興味をもつようになりました」

こうして自分のからだを復活させながら、何か患者の治療に役立つ自然療法はないものかと考えた中村さんは、1996（平成8）年、代替療法の研究者の勉強会であるホリスティック医学協会に入会する。その年に開催された第9回総会では、1日目が東洋の漢方医学やインド医学、2日目に西洋の代替療法が紹介された。なかでも、2日目のトップに発表された1番目のホメオパシー、2番目のフラワーエッセンス（※花の生命エネルギーを水に転写したもので、心や感情のバランスを整えるための自然療法）の説明について、とくに興味をもった。

「フラワーエッセンスの説明は、その概念もよく納得できたのですが、ホメオパシーのほうはまるで雲をつかむような話で、正直なところ全然わかりませんでした。（笑）しかし、治療のパワーは相当ありそうだという、強烈な印象だけは伝わってきました」

## ★ホメオパシーの先達、左近さくらドクター

その後、ホメオパシーの勉強会にたびたび出席するようになったが、臨床医の受講者は数える程度で、アロマセラピーやハーブなどの関係者が大半を占めていた。まだ、ホメオパシーは本物なのか、偽物なのかよくわからない。はたして医療として成り立つものなのかどうかを見極めたい。現代西洋医学を学ぶ医師として、代替療法への疑いを持ちながら、もし本物であれば自分の治療にとり入れたいという気持ちが強くなっていった。

「ある方から左近さくら先生という、ホメオパシーだけで診療所を開いておられるドクターを紹介されました。偶然、東京女子医専（東京女子医科大学の前身）ご出身で、私の大先輩にあたる方だったので、すぐに弟子にさせていただきました。ご年配の患者さんがコンスタントに受診されていて、左近先生が、“これ（ホメオパシー）は正統な医学よ”、とおっしゃる意味がよくわかりました。イギリスやアメリカのホメオパシーの歴史や現状などもくわしくお聞きして、私のなかで疑い深さがだんだん薄らいできました」

ところが、数ヶ月後に左近ドクターは脳梗塞を起こして入院、日常生活は差し支えない程度まで回復したが、ホメオパシー診療のほうはリタイアせざるをえなくなった。中村さんにとって大先達の指導を失い、ホメオパシーへの道を閉ざされる形となった。

そのころ開設されたホメオパシー専門学校に通い始めたが、当時の日本に入ってきたホメオパシーの情報は、さまざまな流派によってアレンジされたものが多く、医師として治療理論の基本から学ぶためには、決して満足できるような内容ではなかった。

チャンスは2000（平成12）年に訪れた。自然医療の本場、イギリスの王立ホメオパシー病院が、医師であれば受講可能というホメオパシー通信教育講座を開いていたのである。

早速、1年間の通信講座を受けるとともに、6月には2週間のサマースクールにも参加した。王立病院での研修もあり、ホメオパシー医療の現場

も見る事ができた。

「通信教育や文献などで、一通りのホメオパシー理論は学びましたが、エキスパートと呼ばれる英国のホメオパシー医でも、患者さんに合った薬(レメディ)を選ぶのに苦労していることを知りました。実際の病気や症状というのは、患者さんのところとも複雑にからみあっているのです、なかなか一筋縄にはいかないのです」

### ★薄めるほど強くなる、レメディのパワー

創始者であるドイツ人医師のサミュエル・ハーネマンが体系化したホメオパシーの理論には、「類似の法則」「極微量投与の法則」「ホリスティック医療」という3つの基本原理がある。

中村さん監修の『ホメオパシー セルフケア BOOK——自然治癒力を引き出し、ココロとカラダを癒す 早く解消したい身近な症状に、家庭で使える70種の救急レメディ』(新星出版社、2003年)の内容を要約して、ホメオパシー医療のアウトラインを紹介しよう。

第一は「類似の法則(類をもって類を癒す)」と呼ばれるものだが、そもそもホメオパシーとはギリシャ語のホメオ(同じようなもの)と、パトス(病気、苦しみ)を組み合わせた言葉であり、健康な人に特定の症状を引き起こす物質は、病気の人の同じ症状を治すことができるという考え方である。

ハーネマンがあるとき、英国人のウィリアム・カレンが著した『薬物書』のなかで「キナの皮(キニーネの原料)がマラリアに効く」という記述を見つけ、健康体である自分がキナの皮(煎じ液)を飲んだらどうなるかという実験をした。すると、発熱、悪寒、震え、虚脱など、マラリアに罹ったときと同じ症状が現れることがわかった。彼は同じ実験を7回も繰り返し、7回とも同じ結果となることを確かめた。

その後、彼自身や友人たちを動員して、さまざまな薬の働きを試すブルーピング(実証)を積み重ねていった。古代中国には、自然界の植物が食用になるか薬用になるか、あるいは有毒なのかを自分のからだで実験して、何度も中毒を起こして

死にかけた神農(しんのう)氏という伝説上の人物が登場するが、からだに現れる症状をブルーピングで確かめたハーネマンの勇気もそれにひけをとらない。

第二の「極微量投与の法則」は、なかなか理解するのがむずかしい。ギリシャ語で「元にもどる」という意味のレメディ(ホメオパシー薬)は、その成分を極限まで薄めて作られている。「類似の法則」でもふれたように、**レメディの原材料になる物質は病気と同じ症状を引き起こすので、薄めて使わないと副作用のおそれがある**。そこで、原材料から抽出した母液1に対して、アルコールと水の混合液99を加えて薄めた100倍希釈を1Cのポテンシー(希釈度数)と呼び、同時にその希釈液をはげしく振る、これを何回も繰り返すことで、その物質のなかで眠っていたパワーが強化されると考えたのである。

たとえば、よく用いられる12C(100倍希釈を12回繰り返す)のレメディに含まれる最初の母液は、10の24乗分の1まで希釈され、原子を構成する超微粒子よりも小さい大きさ、つまり何も含まれていないと同じ、限りなくゼロに等しい状態となる。

この現象は「水が記憶する」、あるいは「物質情報が水に転写される」という仮説で説明されるが、超微量まで希釈されたレメディ溶液が元の分子の作用を伝えることは、フランスの科学者・ベンベニスト博士の実験によってすでに明らかにされているという。

こうして作られた超希釈液を、粒状または顆粒状の乳糖(ラクトース)にむらなくかけて浸透させ、それを乾燥させたものが標準的なレメディである。これを口のなか(舌下)で溶かすようになめるだけで、心身のエネルギーが高まり、自然治癒力が復活するのだという。一般的には6C、12C、15C、30C、200Cのレメディがよく使われている。

### ★合うレメディを選べば、劇的に症状が改善。

第三の「ホリスティック医療」は、目の前の病気や症状だけでなく、病気になっている患者の丸

ごと全体、こころ、からだ、たましいのアンバランスを整えて、元の健康をとり戻そうという全人的（ホリスティック）な治療のことである。ハーネマンがアロパシー（対症療法）医学と呼ぶ現代西洋医学とは対極にある考え方であり、中医学（中国の伝統医学）、インドの伝統医学であるアーユルヴェーダなど、多くの代替療法にも通底する独特の治療哲学をさしている。

「朝になると発熱し、性格が粗暴になる不登校の中学生がいて、夕方になるとおとなしい子どもに戻る。スクールカウンセラーにも、家族のなかにその子を抑圧している人がいると指摘されたそうです。実はそれはお母さんだったのですが、カルシノシン（動物のガン細胞から作ったレメディ）が効くタイプだと判断して、高いポテンシーで1回とってもらったら、すごく体調がよくなりました。

約1年間経過の後、粗暴さや朝の発熱もすっかり消えて、不登校から完全復帰を果たしました。ちょうどホメオパシーを始めたころでしたから、このようにダイナミックな改善例に出会えたことは、何より大きな励みでしたね」

先日、全身のひどい痛みで悩む50歳代の女性患者が来院した。同ビレッジ総院長の山本竜隆さんから「この患者さんは漢方の治療より、ホメオパシーのほうが向いているかもしれない」と、ライフアートクリニック（※取材当時勤務していた）・中村院長あて紹介されてきた。

「この方は自分の痛みについて15分ぐらい一気にまくしたて、聞き役の私まで痛くなるほどでした。これまで病院でもらった漢方薬、消炎剤、痛み止めはすべて効かなかったそうで、あまりにもつらそうなお様子からは、ホメオパシーのアスピリンとも呼ばれ、痙攣性の痛みや神経痛に直接働くマグ・フォス（鉍物の磷酸マグネシウムから作ったレメディ）が合うと考えられました。この女性はとても気丈な方で、パワフルな分だけ痛みも強いようでしたので、ポテンシーが非常に高い200Cを処方しました。

1日1錠のレメディを口に含むだけですが、3日後にははげしかった痛みも大分落ち着きました。

その後、5ヶ月のうちに3回受診されましたが、どんどん痛みが軽くなってきて、最近はいざらくお見えになりませんので、もうよくなりましたのだと思います」

### ★患者が話す物語から、治し方を読みとる

ホメオパス（ホメオパシーの専門医）は、問診において「偏見なき観察者」であることが常に求められている。患者がしきりに訴える病気の症状だけでなく、無意識に語られる小さなできごとや人生の悩みに耳を傾けることを通じて、そのストーリーのなかから最も必要とされているレメディを読みとれるようになるのだという。

「私たちは問診でうかがう患者さんの話（物語）をベースにして、約2000種類ものレメディ情報が収められた『マテリアメディカ（ホメオパシーの薬物辞典）』や、症状ごとによく効く複数のレメディが網羅された『レパートリー（症状別レメディ検索事典）』を手がかりに、患者さん固有の物語によく合うレメディをさがし出して、そのポテンシー（希釈度数）の高さを推測します。15Cよりポテンシーが高い30Cのほうがパワーは強くなりますが、患者さんによっては低いポテンシーのレメディを必要とする場合もあるのです」

ホメオパシーでは、目に見えないバイタルフォース（生命の活力）の乱れにレメディが直接働きかけることで、エネルギーレベルでの修復が行われるのだという。

ホメオパシーの自然医療に情熱を燃やす、中村さんの明るく澄んだ声が、いのちの奥底、たましいにやさしく響いている。

（『あきらめない！もうひとつの治療法』19～29ページ）